

受胎

初めての発情は10か月目で来た。数度の成長停滞で、かなり成長が遅かったので、主人は彼女に18～19か月位で種付けしようと考えていたが、秋の台風の後、パドックがひどくぬかるんでいたの、あまり牛達の様子を見に行くことが少なく、つい発情を見逃してしまい、実際に種付けをした時には21か月目になっていた。



この頃のあたしってなんか変だった。3週間に1回位とっても変な気になるの。他の子に乗ったり乗られたりすると、いくらホッとするんだけど、どうもすっきりしないのよね。だけど御主人様は何時まで経っても何もしてくれないの。そんな時、知らない白い服を着たおじさんが来て、あたしに何か入れるんです。それっきり、変な気持ちになることもなくなったの。ちょっぴり残念な気もするの。あら、あたしったらちょっとエッチ？

妊娠期

種付け後はまた違うグループに移された。今度の囲いは妊娠牛だけのグループだった。彼女は再び序列の最下位になってしまい、大きな牛にいじめられた。

今度のグループに与えられる飼料は乾草だけだった。美味しくないと、食っても余力は沸いてこないが、季節は冬で寒さに耐えるため、大きな牛の目を盗んでは必死になって食べた。



グループが変わるとまたお姉さん達にいじめられたわ。でも寒い時は何でも良いから食べなきゃ死にそうな気がしたから、必死だったの。何かコソ泥になったみたいで、情けなかった。いじめられた時の逃げ場が欲しかったわね。

春になり、やっと序列が上がってきた頃に放牧された。草の状態は決して良くはなかったが、序列が上の方だったので、何とか腹が減らない程度に食うことが出来た。



夏は暑かったが、放牧地の中に沢があって、虻や蚊がやたらに多いの。みんな、だいぶ刺されたわ。あたしは痒い思いをただけで済んだけど、乳房をひどく刺されて乳房炎になっちゃった子もいたのよ。虫対策も何か考えて欲しいわね。



次号につづく

事件は現場で起きています



「悲牛院花子の生涯」(その2) ～育成をなめたらいかんぜよ～

平成4年営農改善資料『特集育成牛』20版より

広酪事業推進課 係長 大島達夫

前回の俗名・花子のあらすじは、誕生から離乳までの生い立ちまでを紹介しました。今月も花子の悲しい物語をご紹介します。今は亡き花子。その運命は……。育成牛の主人公の花子の立場になってお読み頂きたいと思います。

群れ飼いへ

離乳後しばらくしてハッチから出され、育成用の囲いに移された。同じ日に生まれたケメ子(花子と同じ雌子牛)も同じグループに入ってきた。

ケメ子の首には線状の生々しい傷が入っていた。長いことトワインで繋がれていたため、成長に伴ってトワインが首に食い込んで傷を作ってしまったのだった。

そのグループには十数頭の先輩牛が入っていた。地面は土で排水が悪かったので、膝まで泥に漬かった。少し小高くなった柵の所に飼槽があり、日に一度配合を与えられたが、大きな牛たちが居座って、怖くてなかなか側に寄れなかった。



ケメ子ったら可愛そうに、ずっと親牛舎の暗がりに繋がれてたんですって。暗かったから首にトワインが食い込んでるのにご主人様も気が付かなかったみたい。後から傷口に白い毛が生えて、首飾りみたいになったの。そう言えば、だいふ後の話になるけど、よそから買われてきた子は、太い筋が三本も入ってたわ。ずっとロープで繋がれてたんですって。

悲牛院花子大姉(俗名 花子)→



飼槽でエサを食べようとしたら、お姉さんたちにいじめられるの。悔しかったけど、お姉さんたちの方が体も大きいし、新入りの立場って凄く弱いの。飼槽のスペースがもう少し広がったらなんとか隅っこのほうで食べれるのに。

この囲いの中でも乾草と配合を与えられた。初めの数か月は思うように食べることが出来なかったが、大きな牛たちが種付けの為に他の囲いに移され、代わりに後輩牛たちが入ってくると、彼女の序列も上がり、餌場の地位を占めることが出来た。日に一度、配合を給与されると、小さな牛を寄せ付けずに、何頭かの大きな牛達だけが食べていたので、彼女は徐々に太っていった。カロリーばかり多くて、タンパクやミネラル等は足りなかったの、体高はあまり増えず、脂肪ばかり付いていった。餌場に居座って、余り歩かなかつたので、爪が伸びてきたが、そのせいで余計に歩かなくなった。

おいしいもんだからどうも食べ過ぎちゃうのよね。男の子がいないもんだから、まわりの目も気にならないし。でも、この時に太っちゃったのが、後から乳が余り出ない原因の一つだったなんて、夢にも思わなかったわ。

